

CAJ

THE COMMUNICATION ASSOCIATION OF JAPAN

# 日本コミュニケーション学会 第42回年次大会

## コミュニケーション学と歴史

Communication Studies and History

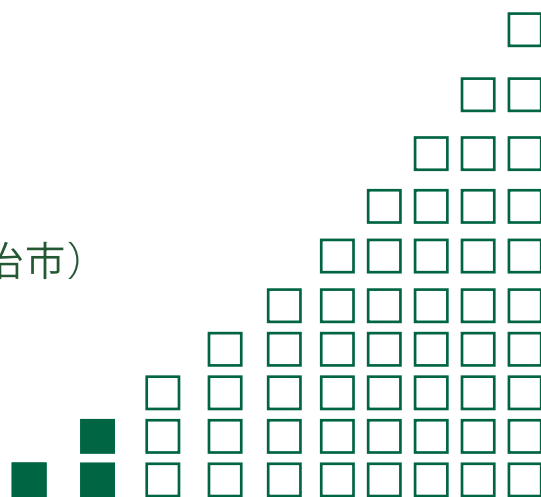
京都文教大学・京都文教短期大学（京都府宇治市）

2012年6月16日（土）～6月17日（日）

June 16-17, 2012

Kyoto Bunkyo University

& Kyoto Bunkyo Junior College (UjiCity)



## [大会参加者へのご案内]

1. 受付は、京都文教大学、常照館(J館)1階にあります。会場は同じビルの2・3階ですが、それぞれの会場へ入る前に、必ず受け付けにお立ち寄りください。
2. 大会参加費は、2日間で会員4,000円(当日払いは4,500円)、非会員の方は5,000円です。参加費にはプロシーディングス代を含みます。参加ご希望の方は(会員・非会員同様に)、学会ホームページを通じて、6月8日(金)までにお申し込み下さい。年次大会へはCAJ学会ホームページより、オンラインで申込みください。郵便振込用紙は同封していません。
3. 大会当日は、大学内のカフェテリアが営業していません。大学周辺にレストランはありますが、お弁当をご希望の方は、大会参加の申し込みと一緒に、ホームページからオンラインで申込み下さい。2日間申込み可能で、一日当たり、飲み物付きで1,000円です。
4. 懇親会の参加費用は6,000円です。当日参加も可能ですが(若干名)、予約の関係上できるだけ大会参加の申し込みの際に合わせて申込みください。懇親会申込みは、大会参加申込み同様に、学会ホームページからお願いします。懇親会はリーガロイヤルホテル京都で行われます。なお、大会会場から懇親会場へは、バスで直接向かいます(無料)。
5. 年次大会の受付周辺にて、書籍やジャーナルのバックナンバー等の販売を行っています。また、飲み物等の用意がございますのでご利用ください。
6. 会場内・会場周辺は全面禁煙です。

## [発表者の方へ]

1. 機器をお使いになる方は、使用可能機種および操作等の確認を予めお願いいたします。PC、プロジェクター、及びスクリーンは発表教室の全てに設置されております。特別でない限り、パソコンを持参する必要はありませんので、データのみご持参ください。Macの利用者で、Macを持参されたい方は、ケーブルもご用意ください。また、操作については午前中の発表の方は、最初のセッションが始まる前、午後の方は昼休みにご確認ください。
2. 研究発表は、質疑応答を含めて30分です。時間厳守でお願いします。
3. 研究発表をなさる方は、完成論文のコピーを当日お持ちください(目安として20部程度)。必ず1部を受付にご提出ください。そして、それぞれの発表会場で、各自コピーを配布してください。プロシーディングスの原稿は完成原稿ではありません。この点十分にご留意ください。会場には、コピーする場所がございませんので、その点もご注意ください。
4. やむを得ない事情で発表ができなくなった方は、すみやかに事務局までご連絡ください。なお、当日の緊急連絡は以下の3つのメールアドレスに同時発信でお願いいたします。

## [司会の方へ]

1. 発表開始10分前までに会場に入り、発表者と事前の打ち合わせを行ってください。
2. 発表開始と発表終了の時間を厳守してください。発表終了の時刻になったら、次の研究発表に移ってください。
3. 発表が取り消しとなった場合は、次の発表の前倒しをしないで、その時間帯をあけておいてください。事前に研究発表の取り消しを、事務局が把握している場合は、その旨をお伝えします。

## [理事の方へ]

1. 大会前日の6月15日(金)に、京都文教短期大学の会議室にて、理事会が開催されます。時間は14:00~16:00です。ご参集よろしくご願ひ申し上げます。

### 事前問合せ先:

会場校担当(大会実行委員長) 森川 知史

〒611-0041 宇治市槇島町千足80 京都文教短期大学

E-mail: morikawa@po.kbu.ac.jp

### 発表・論文について:

学術局 守崎 誠一 E-mail: morisaki@kansai-u.ac.jp

事前問合せ(参加費等について)及び当日問合せ先:

事務局 松本 茂 E-mail: cajoffice@caj1971.com

## **[Information for Participants]**

1. Please register at the registration desk upon your arrival, located in front of the Main Hall on the first floor in Seinan Community Center.
2. The conference fee for two days is ¥4,000 (¥4,500 at the door) for members and ¥5,000 for non-members. Please pay through the on-line registration by June 8 or at the reception desk during the conference.
3. The school cafeteria will be closed on both days (June 16 and 17). Although there are some restaurants, boxed lunches can be purchased for both days, payable in advance by the on-line registration (the price is ¥1,000 per lunch).
4. The convention dinner will be held at *RIHGA Royal Hotel Kyoto*, which is near Kyoto Station. A courtesy bus is available from the conference site. The fee is ¥6,000, payable only in advance by the on-line registration, or at the conference desk on a first-come-first served basis (limited to about 20 people). Local food of Kyoto will be served.
5. Books and back issues of CAJ journals are to be on sale and some refreshments are available on the third floor of J-building.
6. Smoking is strictly prohibited on and around the campus.

## **[To Presenters]**

1. All rooms are equipped with PC, projectors, and screens: you may just bring your presentation data. If you are a Mac user, you can bring it with a cable connector. You are advised to try out the equipment prior to your presentation, either before the first session starts or during lunch time.
2. The length of presentation is 30 minutes including questions and answers. Please adhere strictly to the punctual start and finish times of the presentation.
3. Presenters are requested to bring copies of their full papers on their presentation, and a copy of your paper must be submitted to the registration desk. Be aware that extended abstract included in the conference proceedings is NOT a full paper. One MUST get prepared for paper distributions (approximately 20 copies may be needed).
4. In case of cancellation of the presentation, please notify the Office of Academic Services in advance, or any accidental cancellation should be notified by an e-mail to all three addresses listed below.

## **[To Session Chairs]**

1. Please be at the designated room 10 minutes prior to the start of the session.
2. Strictly adhere to the start and finish times of each presentation.
3. In case of cancellation, do not proceed immediately to the next presentation but leave the time slot intact. You will be notified when any accidental cancellation should happen beforehand.

## **[To CAJ Officers]**

1. CAJ officers meeting will be held at 14:00 through 16:00 on Friday, June 15, at the Main Conference Room of Academic Research Institution Building, Seinan Gakuin University.

### **General Inquiry:**

**Toshifumi Morikawa**

Kyoto Bunkyo Junior College 80 Senzoku, Makishimacho, Uji, Kyoto 611-0041

E-mail: morikawa@po.kbu.ac.jp

### **Inquiry about presentation/papers before the convention:**

Director of Academic Affairs (Conference Planning) Seiichi Morisaki

E-mail: morisaki@kansai-u.ac.jp

### **Inquiry about fees before the convention and any inquiry during the convention:**

Executive Secretary Shigeru Matsumoto E-mail: cajoffice@caj1971.com

# スケジュール

## 第1日 6月16日(土)

	A会場 (J301室)	B会場 (J302室)	C会場 (J214室)
セッション 1 10:00-11:30	学術論文セミナー  学術局		
支部会 11:40-12:10	北海道 (J207), 東北 (J208), 関東 (J301), 中部 (J214), 関西 (J302), 中国四国 (J209), 九州 (J215)		
12:10-13:00	昼食		
セッション 2 13:00-14:30	パネル 中部支部セッション 「コミュニケーションとリベラリズムと その周辺 パート2」 藤 巻	コミュニケーション能力  森 口	テキスト分析  畑 山
14:40-15:40 15:50-16:50 17:00-18:30 19:30~	<b>会場: G102</b> 総会 司会: 松本 茂 挨拶: 宮原 哲(CAJ会長) 安本 義正(京都文教短期大学学長) 基調講演 佐藤 卓己(京都大学大学院教育学研究科准教授) シンポジウム シンポジスト: 板場、日高 司会: 河合 懇親会* (リーガロイヤルホテル京都) 司会: 大会実行委員会委員長 森川 知史		

\*懇親会場が離れているため、懇親会への移動は、無料バスを用意しています。

## 第2日 6月17日(日)

	A会場 (J301室)	B会場 (J302室)	D会場 (J214室)
セッション 3 9:00-10:30	パネル コミュニケーション教育研究会  吉 武	語りと記憶  福 本	
セッション 4 10:40-12:10	パネル レトリック研究会  中 西	パネル 関西支部セッション  森口	異文化適応  伊 佐
12:10-13:00	昼食		
セッション 5 13:00-14:30	特別セッション 「近代日本の雄弁文化」 講師: 井上義和 (帝京大学総合教育センター) 師 岡	組織コミュニケーション  桜 木	
14:30-15:00	公開講演会受付(会場前)		
公開 シンポジウム 15:00-17:00	<b>会場: G102</b> 公開講演会: 原発とコミュニケーション 講師: 小林傳司(大阪大学コミュニケーションデザインセンター)		

# スケジュール

## Day I - June 16 (Sat)

	Room A (J301)	Room B (J302)	Room C (J214)
<b>Session 1</b> 10:00-11:30	Paper Development Workshop  Academic Affairs	( no program )	( no program )
<b>Chapters</b> 11:40-12:10	Hokkaido (J207), Tohoku (J208), Kanto (J301), Chubu (J214), Kansai (J302), Chugoku-Shikoku (J209), Kyushu (J215)		
12:10-13:00	Lunch		
<b>Session 2</b> 13:00-14:30	Chubu Chapter Panel: Communication Studies and Political Philosophy around Liberalism, Part 2  Fujimaki	Communication Competence  Moriguchi	Text Analysis  Hatakeyama
14:40-15:40 15:50-16:50 17:00-18:30 19:30~	<b>Convention Hall: G102</b> General Assembly MC: Shigeru Matsumoto, Akira Miyahara (President of CAJ) Yoshimasa Yasumoto (President of Kyoto Bunkyo Junior College) Keynote Address by Takumi Sato (Kyoto Univ.) Symposium (Panelists: Sato, Itaba, Hidaka MC:Kawai ) Convention Dinner RIHGA Royal Hotel Kyoto*		

\* A courtesy bus is available from the conference site.

## Day II - June 17 (Sun)

	Room A (J301)	Room B (J302)	Room C (J214)
<b>Session 3</b> 9:00-10:30	Panel Session Division of Communication Education  Yoshitake	Narrative and Memory  Fukumoto	( no program )
<b>Session 4</b> 10:40-12:10	Panel Session Division of Rhetorical Studies  Nakanishi	Kansai Chapter Panel: Communication Competence  Moriguchi	Intercultural Adaptation  Isa
12:10-13:00	Lunch		
<b>Session 5</b> 13:00-14:30	Special Panel Session Communication and History  Morooka	Organizational Communication  Sakuragi	(no program )
14:30	Open Registration		
<b>Open Symposium</b> 15:00-17:00	<b>Convention Hall: G102</b> <b>Nuclear electric power generation and communication</b> Hiroshi Kobayashi (Osaka Univ.)		

## 基 調 講 演 Keynote Address

### メディア史の可能性

佐藤 卓巳

京都大学大学院教育学研究科 准教授

メディア史は「新しい歴史学」である。日本では1993年3月設立の「メディア史研究会」があり、日本マス・コミュニケーション学会にも「メディア史研究部会」がある。しかし、「メディア史」を国立国会図書館蔵書データベースでタイトル(副題含む)検索すると、拙著『大衆宣伝の神話 マルクスからヒトラーへのメディア史』(1992年)が最も古い文献としてヒットする。もちろん、メディア史の前には「マス・コミュニケーション史」があり、さらにその前には「ジャーナリズム史」が存在していた。戦前からのジャーナリズム史は教訓的歴史への志向が強く、戦後に始まったマス・コミュニケーション史は実証的歴史学をめざしていたといえるかもしれない。「ジャーナリストはかくあるべし」の規範を前提とするジャーナリズム論は「学問」以前であり、メディアの影響を科学的に測定するマス・コミュニケーション学はその限界を突破する枠組みを提供した。だが、その後カルチュラル・スタディー研究から批判されたように、大学で制度化されたマス・コミュニケーション調査(たとえば世論調査や視聴率分析など)は、文化や価値の問題に踏み込むことができなかった。1990年代の冷戦崩壊後に始まるメディア史は、こうした研究者の位置拘束性 positionality を強く意識する批判的歴史学である。またジャーナリズム史やマス・コミュニケーション史が新聞や放送が社会に与えた影響を主に記述してきたとすれば、メディア史はむしろ社会とメディアの相互作用を分析している。それはメディア史がメディア論と同義のためでもある。新しいメディア(いわゆるニュー・メディア)の文法は古いメディアの文法の変成なので、メディア論の研究はメディア史的アプローチをとらざるをえないのである。メディア史の可能性をコミュニケーション研究との関連において考えてみたい。

#### 【経歴】

佐藤 卓巳 (さとう・たくみ) Takumi SATO

1960年 広島市生まれ

1984年 京都大学文学部史学科卒業。86年、同大学院修士課程修了。87-89年 ミュンヘン大学近代史研究所留学。89年京都大学大学院博士課程単位取得退学。東京大学新聞研究所・社会情報研究所助手、同志社大学文学部助教授、国際日本文化研究センター助教授を経て、現在—京都大学大学院教育学研究科准教授

専攻—メディア史、大衆文化論。

著書—『大衆宣伝の神話』(弘文堂)、『現代メディア史』(岩波書店)、『「キング」の時代』(岩波書店、日本出版学会賞受賞、サントリー学芸賞受賞)、『言論統制』(中央公論新社、吉田茂賞受賞)、『8月15日の神話』(ちくま新書)、『テレビ的教養』(NTT出版)、『輿論と世論』(新潮選書)、『ヒューマニティーズ歴史学』(岩波書店)、『現代史のリテラシー』(岩波書店)、『天下無敵のメディア人間』(新潮選書)など。

## シンポジウム Symposium

### コミュニケーション学と歴史

#### Communication Studies and History

司会： 河合 優子（立教大学）  
シンポジスト： 佐藤 卓己（京都大学）  
板場 良久（獨協大学）  
日高 勝之（立命館大学）

佐藤卓己先生の基調講演を受けて、本シンポジウムでは年次大会のテーマである「コミュニケーション学と歴史」について、講演者を交えて話をすすめていく。現在、コミュニケーションの史的研究が十分に行われているとはいえない。そのため、「歴史のなかのコミュニケーション (communication in history)」「コミュニケーションの歴史 (a history of communication)」「コミュニケーション思想史 (a history of the ideas of communication)」「コミュニケーション・メディアの歴史 (a history of communication media)」といった相互に関連しているが別個の研究テーマ/分野が、漠然と「コミュニケーション史」として一括りにされる傾向にある。同様のことは、コミュニケーション学/研究の歴史にも言える。コミュニケーション学/研究は、さまざまな学問的伝統を基盤として発展してきたが、その多様に入り組んだ歴史的背景や経緯を明らかにするために必要な研究環境や体制は未整備の状態にある。本シンポジウムでは、メディア史とコミュニケーション史、さらにはマスコミュニケーション研究とコミュニケーション学の共通点や相違点などを踏まえつつ、「コミュニケーション学と歴史」というテーマにどのようにアプローチしていけるのか、その可能性と課題について、3名のパネリストとともに考えていきたい。

## 学術局セッション

### 学術論文セミナー

## Paper Development Workshop

学術局では、コミュニケーション研究の質を高める活動を目的とし、いくつかの試みを検討している。その一つとして、国内や海外の学術誌に投稿し、掲載に至るためのスキルの向上があげられる。研究者としてのこのようなスキルは必要不可欠であり、たとえ質の高い研究がおこなわれていたとしても、実際に出版されて学術的議論の土台に上がるには避けて通れないプロセスといえる。そこで本年次大会の最初に、この査読プロセスに焦点を当て、より良い論文に発展させる過程を会場の皆様と一緒に考える場を設けたい。

#### <第一部>

### 査読プロセス A to Z 査読者の目からみた「通せる論文」と「落とす論文」

松永 正樹(立教大学経営学部)

第一部では、*Human Communication Research* 誌の常任査読者であり、重要な国際ジャーナルの査読に携わる松永正樹先生をお招きし、査読プロセスについて実演解説を行っていただく。松永先生は、全米コミュニケーション学会(NCA)対人コミュニケーション分科会や家族コミュニケーション分科会の投稿論文査読者を務め、累計120本以上の論文審査経験を持つ。ここで取り上げる査読の場としては、主にアメリカにおけるジャーナル、あるいは学会発表審査を想定し、ジャーナル編集長、あるいは、学会分科会長から査読者が審査を依頼されてから、最終的に論文掲載ないし発表の可否に関する評価を約1~2ヶ月の間にまとめるまでの流れを実演形式で解説する。解説のための題材として、評価の異なる量的研究論文を2本取り上げ、それぞれに共通する査読上のポイントと同時に、論文の中のどのようなポイントで評価が分かれるかについて解説する。解説にあたっては、個々のポイントに関する解説に合わせて、査読者が論文の紙面に走り書きをしたり、下線をひいたりする様子をそのまま来場者が見て追体験できるよう、題材の論文をデジタルOHPで会場のスクリーンに投映する実演形式をとる。

#### <第二部>

### ダイアログとしての査読プロセス

司 会： 清宮 徹(西南学院大学)  
コメンテーター：宮原 哲(西南学院大学)  
コメンテーター：学 術 局

第二部では、宮原先生から、査読についてのご経験やポイントをお話しいただき、そののち来場者との質疑応答を通して、個別の問題点や査読に関する疑問点を考えていく。また会場の方からもいろいろな体験を共有いただき、どのように論文を発展させていくかを一緒に考える。これから海外・国内のジャーナルに投稿し、論文執筆を考えている方にとって、有益で建設的なワークショップにしていきたい。



## 中部支部パネル Chubu-Chapter Panel

### コミュニケーションとリベラリズムの周辺～パート2～

- 司会： 藤巻 光浩 (静岡県立大学)  
発表者： 高橋 芽惟 (静岡県立大学国際関係学研究科)  
福本 明子 (愛知淑徳大学)  
松林 邦夫 (エリザベス・サンダースホーム)  
指定討論者： 青沼 智 (津田塾大学)

中部支部は、昨年度に引続き、コミュニケーション学と政治哲学との接点の探索を試みる。コミュニケーション学が近代学術であることを考えれば、リベラリズムとの関係が深いことは当然である。その一方で、多文化主義やコミュニタリアニズムとの関係もかなり深いと言える。それでも、あらゆる社会知が構築主義的に形成されることを前提とすれば、単に「コミュニティ」なのか「個人」なのかといった選択肢は、ナイーヴすぎるのかもしれない。本パネルでは、リベラルとコミュニタリアンの論争を下地とし、そこでの論点を前景化させ、その中で、コミュニケーション学に独特のアプローチ方法が可能なのかを模索する。

まず、高橋論文は、1991年米国ニューヨーク市で生じた聖・パトリック・パレード論争を事例に引付けて考察する。ひとはみな特定の「アイデンティティ」に帰属すると捉える多文化主義的なアイデンティティ観が、いかに「性的マイノリティ」の「公共」の場への参加を制限することに寄与するのかを考察する。

松林論文は、近代リベラリズムが啓蒙・愛情の対象として「家庭」に配置した「子供」の役割に焦点を当て、そのような「子供」が「ネグレクト」されている現状に焦点を当て、本パネルの問題に切込む。ドキュメント『ネグレクト』(杉山春 他)から、その現実化された社会の中で、児童虐待という社会問題から<おとな>と<こども>の力関係と人権の揺らぎによる言説を捉えていく。

福本論文は、サンデルの公共哲学と異文化コミュニケーションの交差点について考察を深める。サンデルの『民主政の不満 公共哲学を求めるアメリカ』から、彼の公共哲学の背景をたどり、熟議による共和主義へ至った議論を踏まえ、サンデルが捉える「熟議」の条件を再構築し、「対話」や紛争解決・ミディエーションとの関連を中心に考察する。

この中で、本パネルなりの、コミュニケーション学と政治哲学との接点を探る。

## 関西支部パネル Kansai-Chapter Panel

### ダイアログリーグ： コミュニケーション力とは何か

司会： 森口 稔 (京都外国語大学)  
発表者： 坂田 淳 (有限会社スマート・アイ)  
発表者： 大坊 郁夫 (東京未来大学)  
発表者： 森川 知史 (京都文教短期大学)

本発表の目的は2点ある。一つは、ダイアログリーグというコミュニケーションの形式を紹介することであり、もう一つは、ダイアログリーグを通して、コミュニケーション力について議論することである。

ダイアログリーグは、パネルディスカッションと異なり、2人ずつの対話を中心となる。まず、簡単に各自の考えを紹介した後、3人による3組の対話を行う。その後、フロアを含めたディスカッションで議論を深める。一対一の対話であるからこそ、1人ずつであったり、3人同時ならば、出てこないような話を引き出すことも可能となる。また、対談の際、コーディネーターが横に控え、必要に応じてコメントを入れることもある。

コミュニケーション力についての3人の立場は異なる。坂田は、組織の問題解決のための設計型コミュニケーション力の研修を展開してきた。「ソフトウェア会社でのプロジェクト管理における折衝交渉セミナー」や「金融会社での新規開拓営業における警戒心のとき方、ひきつけ方」など、豊富な事例を有する。大坊は、対人コミュニケーション研究を専門とし、現在は、スキル・トレーニングをテーマとしている。社会的スキルを基礎づけるコミュニケーション力(スキル)は文化や世代を超えて重要であり、社会的関係の基礎力を形づくると考えている。森川は、昨今の「コミュニケーション力」の必要性の喧伝ぶりに疑問を呈する。企業がコミュニケーション力のある人材を求めることは、一方で、「コミュニケーション力」のない人を切り捨てていく危険があるのではないか、という疑問である。

ダイアログリーグの面白さと難しさは、予測不可能性にある。「コミュニケーション力」というトピックで、上記3人の対談がどちらに向かうかはわからない。ただ、自らが「コミュニケーション力」の専門家である3人の対談は必ず実りのあるものと期待できる。

## <パネル> コミュニケーション教育研究会

### Division of Communication Education

#### ラウンドテーブル

司会： 吉武 正樹（福岡教育大学）  
話題提供： 五十嵐 紀子（新潟医療福祉大学）  
話題提供： 三原 祥子（東京女子医科大学）  
話題提供： 松本 茂（立教大学）

若者のコミュニケーションにまつわる問題がマスコミで頻繁に取り上げられ、教育界のみならず広く社会において児童・生徒・学生のコミュニケーションに関連する基礎的な能力の育成の重要性が語られている。そんな中、日本コミュニケーション学会においては、これらの課題に対する研究が進展・深化しているとは言い難い状況である。そこで、今回、3名がコミュニケーション教育に関する今日的課題について話題提供を行い、その後、出席者全員で意見および情報の交換を行い、研究の活性化を図る。

#### 〔話題〕 『コミュニケーション力の高さ』という価値観に縛られる学生が抱える問題

コミュニケーション力の重要性が強く強調される社会において、大学生が大学生活においてもコミュニケーションを意識する機会は日常的となっている。友人が多く人づきあいが上手い、という理想の学生像に合わなくなること、あるいはそのように周りから見られていないのではないかと怯える、というコミュニケーション不安の問題を抱える学生は多い。時に心を病んだり、大学生活になじめなかつたりして退学してしまうケースも少なくない。メディアで取り上げられ話題となった「便所飯」、学生の間で日常用語として使われている「リア充」などを例に、学生が「コミュニケーション力の高さ」ということにかに支配され、自身をコントロールすることに問題を抱えているのかを議論したい。

#### 〔話題〕 医学部・看護学部におけるコミュニケーション教育の構造的問題

医師・看護師のコミュニケーションに対する社会・市民（以下、ノンメディカル）の関心は高い。この社会的ニーズに対応すべく、近年、医学部や看護学部において、コミュニケーション教育への期待は大きくなっているが、その主たる指導責任者・評価者は、医師・看護師である。メディカルスタッフにしかわかりえぬ専門的知識・技能という障壁により、ノンメディカル教員がその特性を活かし主体的に関われるのは、現状では初年次が中心になっており、「再生産」される構造になっている。このような教育の枠組において、医師・看護師になる学生がノンメディカルの期待、ニーズ、理解度、心地よさ等を理解・尊重できるようになるには、ノンメディカル教員はどのような支援ができるのか、考えてみたい。

#### 〔話題〕 初等教育におけるコミュニケーション教育の動向と課題

文化庁は「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」の事業を展開し、芸術家等と教師の連携による芸術表現体験活動を取り入れたワークショップ型の授業を実施している。この事業の効果の検証をひとつの目的として、文部科学省は「コミュニケーション教育推進会議」（座長：平田オリザ）を2010年5月に設置し、2011年8月に同会議での審議の経過をコミュニケーション能力の定義を含め、発表した。文部科学省が公式文書にコミュニケーション能力を定義づけたのはきわめて珍しいことであり、注視すべきである。この会議の背景、定義、芸術表現に偏重した活動の推進事業等について情報を提供し、主に初等教育におけるコミュニケーション教育の在り方について討議したい。

<パネル> レトリック研究会  
Japan Society for Rhetorical Studies

レトリック研究会座談会  
-日本の大学におけるレトリック教育の現状と将来像-

司会： 中西 満貴典（岐阜市立女子短期大学）  
発表者： 畑山 浩昭（桜美林大学）  
発表者： 藤巻 光浩（静岡県立大学）  
発表者： 田島 慎朗（神田外語大学）

日本コミュニケーション学会(CAJ)レトリック研究会では、本年度の年次大会において、日本の大学カリキュラムにおけるレトリック教育の現状そして今後のあるべき姿に関する対話の場を設けたい。昨今、コミュニケーション学またそれに関連する学部・学科・科目が日本の大学において増えている一方、有史、コミュニケーション学の中心的な存在として、時代・文化・国境を越えて受け継がれてきたレトリックの知見について広く認知されているとは残念ながら言い難い状況である。このような状況を踏まえ、本企画パネルでは、本研究会所属の3名のレトリック研究者をパネリストに迎え、各々「リベラルアーツ学群専攻科目としてのレトリック教育」「コミュニケーション学科科目としてのレトリック教育」「公民（地球市民）教育のためのレトリック教育」の視点より「レトリカルなご提言」を頂戴し、それらを軸とした座談会をフロアよりご参加の皆様と共に展開したい。なお、本パネルは、レトリック研究会が企画するものであるが、レトリック研究者によるレトリック研究者のための自己完結的な対話に終始することなく、CAJ 会員/年次大会参加者に広く開かれた対話の場といたしたい。研究会所属・非所属問わず、レトリックの知見をコミュニケーション教育に生かしたいとお考えの多くの皆様のご参加を期待したい。

## 特別セッション

### Special Session

#### <近代日本の雄弁文化>

#### 1930年代の雄弁界の問題意識 - 雑誌『雄辯』を手がかりとして

**講演者: 井上 義和 (帝京大学総合教育センター准教授)**

近代日本の雄弁(弁論/演説)文化の推移を辿るのに、雑誌『雄辯』(大日本雄弁会講談社)は格好のフィールドである。1910年2月の創刊から1941年10月の終刊まで、すなわち第2次弁論ブームの隆盛からその飽和にいたる「雄弁界」を30年間にわたって定点観測できるからだ。講演では1930年代の『雄辯』誌面から、当時の「雄弁界」がどのように自分たちの現状を認識し、どのような変革の必要性を考えていたのかをみてみたい。

なぜ1930年代なのか。明治初め(1870年代半ば)に福沢諭吉がspeechに演説という訳語をあて、慶応義塾で普及に取り組み始めたことはよく知られている。また近代日本の弁論の歴史というと、自由民権運動での政談演説や様々な団体や学校での普及活動などに焦点が当てられてきた。1930年代というのは、欧米から演説が輸入されてから60年がたち、いわば日本型speechとしての雄弁が定着し、その限界が見えてきた時代なのである。

明治末の第2次弁論ブームのときに旧制高校・大学生だった雄弁青年たちが20年余りを経て社会の中堅を担い各界の指導的地位に就き、その目線から過去はどのように回顧され、現状はどのように映っているのだろうか。『雄辯』誌上ではこの時期何度も雄弁をテーマとした座談会が行われているが、ここからは、この20年のあいだに何が大きく変わり、何が相変わらず続いているのかが浮かび上がってくるだろう。

また1936年に4号にわたって「中等学校以上に雄辯科設置」の是非をめぐる論争が行われている。各界の識者が様々な意見を寄せているが、そこから浮かび上がってくるのは、演説輸入から60年を経てみえてきた雄弁(弁論/演説)文化の日本的条件である。さらに、演説は輸入したものの、正統な学問体系としての雄弁学や正規の教育課程としての雄弁科がついに実現しなかったのはなぜか—そんな問いについても考えてみたい。

## 公開シンポジウム\*

### Open Symposium

[受付]14:30 [講演]15:00

## 原発とコミュニケーション

**講演者**：小林 傳司（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）  
**指定討論者**：青沼 智（津田塾大学）  
**指定討論者**：吉武 正樹（福岡教育大学）

昨年度の年次大会では「東日本大震災とコミュニケーション」をテーマにランチミーティングを開催したが、今年度は公開シンポジウムの形で、原発とコミュニケーションをめぐる一連の問題について考え、討議していく。シンポジウム前半部では、『トランスサイエンスの時代』（NTT出版、2007年）や『誰が科学技術について考えるのか--コンセンサス会議という実験』（名古屋大学出版会、2004年）など、科学技術コミュニケーションに関する多くの著作をもつ大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの小林傳司氏に、「原発とコミュニケーション」をテーマに講演していただく。シンポジウム後半部ではパネル・ディスカッションの場を設け、同テーマについてコミュニケーション研究者の側から積極的に問題提起をし、小林先生を交えて話を深めていく予定である。

\* 公開シンポジウムは、日本コミュニケーション学会の会員以外の方も自由に参加できます。

6月16日(土) Saturday, June 16 11:40-12:10

## 支部会議 Chapter Meetings

各支部でミーティングを行います。部屋割りについてはスケジュール表をお確かめ下さい。  
Chapter meetings will be held in the assigned rooms, as listed on the schedule of events.

6月16日(土) Saturday, June 16 15:50-16:50 @ G館 :G102 (G Building : G102)

## 総会 General Assembly

司会： 松本 茂

開会の辞： 宮原 哲 (西南学院大学・日本コミュニケーション学会 会長)

挨拶： 安本 義正 (京都文教短期大学 学長)

6月16日(土) Saturday, June 16 19:30- @リーガロイヤルホテル京都 (RIHGA Royal Hotel Kyoto)

## 懇親会 Conference Dinner : リーガロイヤルホテル京都

司会： 森川 知史 (京都文教短期大学 大会実行委員会委員長)

京都らしいお料理を沢山ご用意しています。懇親会は19:30に開始。皆さまのご参加をお待ちしております。

京都駅から徒歩5分。大会会場(京都文教短期大学)から無料バスにて懇親会会場に直接向かいます。

会費 6000円、大会申込ホームページから、事前にお申込み下さい。\*当日申し込みは、16日朝までに(先着で若干名)

## 書籍・教育機材の展示

コミュニティーセンター・ホール(受付横)にて、各種の展示を行っています。ご自由にご覧ください。

A variety of educational materials are to be displayed beside the reception desk in "Community Center Hall".

### 宿泊のご案内

京都駅周辺の宿泊をお勧めします。年次大会へのオンライン申込みのサイトから、京都駅周辺のホテルが申し込めるようになっております。大会会場へのアクセスもよく、懇親会場にも近いホテルをご用意しておりますので、ぜひこちらをご利用ください。

### 昼食のご案内

大学内の食堂は利用できません。お弁当をご希望の方は、オンライン申込みのサイトから、大会申し込み時に一緒に申し込み下さい。大学周辺にはいくつかのレストランがあります。

6月16日(土) Saturday, June 16

受付 9:30 ~ Registration commencing at 9:30

時間	会場	プログラム Session
10:00 11:30	A会場 (J301)	<p><b>&lt;セッション 1&gt; 学術局セッション</b></p> <p>学術論文セミナー <span style="float:right">Paper Development Workshop</span></p> <p>第1部 査読プロセス A to Z 査読者の目から見た「通せる論文」と「落とす論文」 松永 正樹 (立教大学)</p> <p>第2部 ダイアログとしての査読プロセス</p> <p>司 会：清宮 徹 (西南学院大学) コメンテーター：宮原 哲 (西南学院大学) コメンテーター：学 術 局</p>
11:40 12:10	J207 J208 J301 J214 J302 J209 J215	<p><b>支部会議</b> <span style="float:right">Regional Chapter Meetings</span></p> <p>北海道支部 Hokkaido 東北支部 Tohoku 関東支部 Kanto 中部支部 Chubu 関西支部 Kansai 中国四国支部 Chugoku &amp; Shikoku 九州支部 Kyushu</p>

<p><b>昼食</b> <span style="float:right">Lunch</span></p>
---

13:00 14:30	A会場 (J301)	<p><b>&lt;セッション 2&gt;</b></p> <p>中部支部パネル <span style="float:right">Chubu Chapter Panel</span></p> <p>「コミュニケーションとリベラリズムとその周辺 ~パート2~」</p> <p>司会： 藤巻 光浩 (静岡県立大学)</p> <p>発表者： 高橋 芽惟 (静岡県立大学国際関係学研究科)</p> <p>松林 邦夫 (エリザベス・サンダースホーム)</p> <p>福本 明子 (愛知淑徳大学)</p> <p>指定討論者：青沼 智 (津田塾大学)</p>
----------------	---------------	--



時間	会場	プログラム Session
13:00 14:30	B会場 (J302)           C会場 (J214)	<p>&lt;セッション 2 &gt; コミュニケーション能力 Communication Competence</p> <p>司会： 森口 稔 （京都外国語大学）</p> <p>1. 企業が採用時に重視するコミュニケーション能力と採用後の若手社員に対する評価 町田 佳世子（札幌市立大学） 後藤 真 澄（有限会社プロ・アシスト）</p> <p>2. シンガポールにおける外国人労働力と英語 岡本 佐智子（北海道文教大学）</p> <p>3. コミュニケーション教育のチャレンジ - きく力を涵養する実践教育プログラム - 穂田 照 子（桜美林大学）</p> <p>テキスト分析 Text Analysis</p> <p>司会： 畑山 浩昭 （桜美林大学）</p> <p>1. Reflecting on the Culture of Racisms in Japan through a Textual Analysis of the 'Hello, Mr. Gaijin' Mask Fumi Sakata (Queen's University, Canada)</p> <p>2. 現代社会における笑いの位置と、そのコミュニケーション学的考察の意義 埴 幸枝（国際基督教大学大学院）</p>
14:40 15:40	G102	<p>総会 General Assembly</p> <p>司会： 松本 茂 （立教大学）</p> <p>開会の辞：宮原 哲（西南学院大学・日本コミュニケーション学会 会長） 挨拶：安本 義正（京都文教短期大学 学長）</p>
15:50 16:50	G102	<p>基調講演 Keynote Address</p> <p>メディア史の可能性 佐藤 卓己（京都大学）</p>
17:00 18:30	G102	<p>シンポジウム Symposium</p> <p>コミュニケーション学と歴史</p> <p>司会： 河合 優子（立教大学） シンポジスト： 佐藤 卓己（京都大学） 板場 良久（獨協大学） 日高 勝之（立命館大学）</p>
19:30	リーガロイヤルホテル 京都	<p>懇親会 Reception</p> <p>大会ホームページから申込み下さい。当日朝、受付にて申し込みも可能です（先着若干名）。 京都のおいしい料理をご用意しています。（会費 ¥6,000） 懇親会場(リーガロイヤルホテル京都)は、大会会場からバスで直接移動します(無料)。 バスは 18:50 出発予定。</p>

6月17日(日) Sunday, June 17

受付 8:30 ~ Registration commencing at 8:30

時間	教室	プログラム Session
9:00 10:30	A会場 (J301)	<p><b>&lt;セッション 3&gt;</b>  <b>パネル コミュニケーション教育研究会</b>      Division of Communication Education  「ラウンドテーブル」</p> <p>司会：吉武 正樹（福岡教育大学）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>『コミュニケーション力の高さ』という価値観に縛られる学生が抱える問題 五十嵐 紀子（新潟医療福祉大学）</li> <li>医学部・看護学部におけるコミュニケーション教育の構造的問題 三原 祥子（東京女子医科大学）</li> <li>初等教育におけるコミュニケーション教育の動向と課題 松本 茂（立教大学）</li> </ol>
	B会場 (J302)	<p><b>語りと記憶</b>      Narrative and Memory</p> <p>司会：福本 明子（愛知淑徳大学）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>記憶が歴史認識に与え得る影響 「公共(性)」の媒介機能からの考察 - 千葉 美千子（北海道大学大学院）</li> <li>水俣病/水俣病事件を語りつぐための模索 ある語り部補助の試みから考える 池田 理知子（国際基督教大学）</li> </ol>
10:40 12:10	A会場 (J301)	<p><b>&lt;セッション 4&gt;</b>  <b>パネル レトリック研究会</b>      Japan Society for Rhetorical Studies  「日本の大学におけるレトリック教育の現状と将来像」</p> <p>司 会：中西 満貴典（岐阜市立女子短期大学）  パネルリスト：畑山 浩昭（桜美林大学）  藤巻 光浩（静岡県立大学）  田島 慎朗（神田外語大学）</p>
	B会場 (J302)	<p><b>関西支部パネル</b>      Kansai Chapter Panel  「ダイアログリーグ： コミュニケーション力とは何か」</p> <p>司会：森口 稔（京都外国語大学）  パネルリスト：坂田 淳（有限会社スマート・アイ）  大坊 郁夫（東京未来大学）  森川 知史（京都文教短期大学）</p>

10:40  12:10	C会場 (J214)	<b>異文化適応</b> <b>Intercultural Adaptation</b> 司会： 伊佐 雅子（沖縄キリスト教学院大学） 1. 異文化でのコミュニケーションがパーソナリティに与える影響 アメリカ在住日本人へのライフストーリーインタビューを通しての考察 田中 真奈美（東京未来大学） 2. 沖縄県在住フィリピン人女性の生活実態調査 仲里 和花（沖縄キリスト教短期大学） 3. The sound of silence Japanese graduate school students in English science and engineering lectures Mika Tamura（九州大学）
--------------------	---------------	--

<b>昼食</b> <b>Lunch</b>
---------------------------

時間	教室	プログラム Session
13:30  15:00	A会場 (J301)	<b>&lt;セッション 5 &gt;</b> <b>特別セッション</b> <b>Special Session</b> <b>近代日本の雄弁文化</b> 「1930年代の雄弁界の問題意識 雑誌『雄辯』を手がかりとして」 司会： 師岡 淳也（立教大学） 講師： 井上 義和（帝京大学総合教育センター）
	B会場 (J302)	<b>組織コミュニケーション</b> <b>Organizational Communication</b> 1. 提案する部下、しない部下 職場における『Voice』行動に関する縦断的データの分析を通して 松永 正樹（立教大学） 2. 日米企業のコミュニケーションに見られる組織文化の変容-1998～2008年 鈴木 志のぶ（北海道大学） 3. 変革型リーダーのファシリテーション・コンピテンス 池田 章子（明治大学大学院）

<b>受付開始*</b> 14:30  15:00  17:00	G102	<b>公開シンポジウム</b> <b>Open Symposium</b> <b>「原発とコミュニケーション」</b> 講師：小林傳司（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター） <b>シンポジウム</b> 司会： 師岡 淳也（立教大学） 指定討論者：青沼 智（津田塾大学） 指定討論者：吉武 正樹（福岡教育大学） *CAJ会員以外の方も自由に参加できます
---	------	--

## 発表要旨

6月16日(土) Saturday, June 16 11:40-12:10 Session 2

B会場 (J302)  
Room B

研究発表  
Presentation

コミュニケーション能力  
Communication Competence

### 企業が採用時に重視するコミュニケーション能力と採用後の若手社員に対する評価

町田 佳世子 (札幌市立大学)  
後藤 真澄 (有限会社プロ・アシスト)

日本経済団体連合会による『新卒採用に関するアンケート調査』や厚生労働省の実態調査結果は、採用時にコミュニケーション能力が重視されていること、それにもかかわらず採用時において自社が求めるコミュニケーション能力を満足させる候補者が多くはないことを示している。コミュニケーション能力という言葉で具体的にどのような能力要素を想定しているのかを採用側が明確に提示していないことが、企業の期待と被雇用者のコミュニケーション能力の実情の乖離につながっていると考え、本研究では、企業が採用時にどのようなコミュニケーション能力を重視しているのか、また実際に採用した社員のコミュニケーション能力をどう評価しているかを調査し、コミュニケーション能力として求めている能力要素を明らかにすることを試みた。さらに「積極性がある」「明るい」のような漠然としたイメージがどのようなコミュニケーション能力要素を想定しているのかを明らかにすることも試みた。北海道の企業804社に質問紙を郵送し、返送された184の有効回答を分析した結果、採用時に重視するコミュニケーション能力と実際に採用した社員のコミュニケーション能力評価の平均値には、質問項目(43項目)すべてにおいて有意な差が認められ( $p < .001$ )、企業が期待しているコミュニケーション能力と採用後の実情について乖離があることが明らかになったが、同時に重視している能力要素と採用後の評価で上位にきた能力要素は概ね一致することから、基本的なスキルや態度については期待する能力要素の内容に齟齬があるというよりは程度の乖離であると考えられた。また採用時重視している「明るい」「積極性がある」などの概念を構成するコミュニケーション能力要素についても検討し、それぞれが一部重なりあってはいるが異なる能力要素で捉えられていることも示された。

### シンガポールにおける外国人労働力と英語

岡本 佐智子 (北海道文教大学)

本発表は、シンガポールで接客業に従事する外国人労働者を対象に始まったサービスリテラシー・テストの現状と課題を同国の経済戦略から報告するものである。

建国30年足らずで、「アジアの奇跡」と呼ばれるほどの経済発展を遂げたシンガポールは、狭い国土面積に唯一の資源である人材をインフラに組み込み、外資だけでなく、外国人労働力も呼び込んで今日の成功を築いてきた。

シンガポールは右肩上がり成長する国内経済の人材需要に、限られた労働力人口では応えられないことから、外国人労働者に門戸を広げてきている。特に2000年代後半には、少子高齢化社会を回避できない人口推計を背景に、さらに一段と外国人労働力の受入れ拡大政策が推進されていく。しかし、外国人受入れの急増は国民との摩擦を生み、絶対的与党の政権安定さえも揺るがすほどの不満となっていく。それはかつての単純労働

働者の外国人一時滞在とは異なり、高度外国人材の受入れ増が雇用機会を競合させ、外国人高額所得者の高級住宅取得が市民の怒りの矛先であった。このため政府は国民優先を打ち出し、外国人雇用を抑制する方針を発表しているが、技能の有無にかかわらず外国人労働者なくしてはシンガポール国家の発展はないことは明らかである。

特にシンガポール人が就きたがらない職種は深刻な人材不足が続いており、外国人労働者で補ってきた。しかし、英語を解さない外国人の安易な雇用は市民の日常生活にもミスコミュニケーションを引き起こし、社会問題になっている。政府はその対応策として、接客業種に就く外国人にサービスリテラシー・テストを開始したが、その運用ははかばかしくない。それは、英語がこの国の成長を支える基盤言語となったものの、外国人労働者への英語学習支援に関しての意識は弱く、外国人労働力はあくまでも自国経済の調整弁として見ていることにある。

## コミュニケーション教育のチャレンジ

### - きく力を涵養する実践教育プログラム -

穂田(あきた) 照子 (桜美林大学)

「きくこと」によって人は学ぶことができる。実際、耳が聞こえなくなると、話す力と同様、学ぶ力も低下していく(重野、2006)。大学でも聴く力のある学生は、学業においても優秀で、大学院や博士課程に進むものが多い(McDevitt, Sheenaa & McMEnamin, 1991)。また、人は「きくこと」で人の心を思いやることができる。震災を機に、人と人との「絆」の重要性が一層強調されるようになったが、「絆」作りには共感的な聴き方が必要である。さらに「きくこと」によって、人は論理的思考能力や分析力を養成することができる。急速な情報機器の発達により、正誤入り混じった情報が飛び交う現代社会生活には、クリティカルな聴く力が強く求められている。

だが、日本ではこれまで「阿吽の呼吸」や「以心伝心」など「察しのコミュニケーション」傾向が強く、音声言語コミュニケーションは重視されてこなかった。話す力を養成するプログラムは、1990年代後半から大学の初年次教育の一環として普及し始めたものの、「きく力」を涵養するプログラムは、今なおその重要性が余り認識されず、殆ど学問の対象となっていない。しかし、きく力は話す力や書く力と同様、自然に育つのではなく、意識的、計画的な学習の継続が必要である(斎藤、1972)。桜美林大学では、以上のような見識を踏まえ「きく力」を涵養する講座を5年前に開講した。先行研究も大変少なく、今なお試行錯誤は続いているが、この間、学習モデルを構築し、それに沿ってシラバス分析・改善を続け、有効と思われる実験や演習などを継続してきた。その結果、私語が影を潜め、クラスの学びの雰囲気改善され、発言が増えるなどの変化が見られた。その要因の1つは、学生の「聴くこと」の概念の変化にあると考えられる。Imhof と Janusik (2006)によると、個人がなぜ、いつ、どのように「きく」のかを決定する重要なインターフェイスは、個人の主観的な「聴く」概念であると述べている。そうであれば、きく力を涵養するプログラムの成功は、学生の「きくこと」の概念をどのような方法で、どのように変えていくにかかっていると見えよう。

## Reflecting on the Culture of Racisms in Japan through a Textual Analysis of the 'Hello, Mr. *Gaijin*' Mask

Fumi Sakata (Queen's University, Canada)

This paper suggests the toy-like mask of a white man, 'Hello, Mr. *Gaijin*,' as a site of analysis where the culture of racisms is (re)produced in the specific context of post-war Japan. Sold as a gag gift in Japan, the mask, consisting of two stickers for blue-eyes and a prominent plastic nose, embodies the popularized image of whiteness in Japan, and presents it as a source of fascination as well as ridicule and mockery. Approaching this mask as an analytical text, I ask: Why is race so important in understanding Japanese popular culture? C. W. Mills (1997) suggests that there exists a global system that privileges whites and normalizes their beneficial racial position. This trend is certainly omnipresent in contemporary Japan, where one observes the sense of superiority being affixed to the white body in the frequent use of white models in the media (Creighton, 1997). Yet, how is this theory of white supremacy significantly complicated by the particular representations of whiteness seen in the 'Hello, Mr. *Gaijin*' mask? Through mimicry, the power of whiteness is mocked and commodified into a sleazy toy mask. Critically engaging with these primary questions, the paper situates the analysis of the 'Hello, Mr. *Gaijin*' mask within the context of post-war Japan where the culture of whiteness holds its unique complexity and significance in the society. Drawing largely on the idea of 'the culture of racisms' that Goldberg (1993) suggested, this paper argues that the seemingly contradictory sentiment towards whiteness embodied in the mask presents the key to the holistic understanding of Japan's particular culture of racisms in the post-war context.

## 現代社会における笑いの位置と、そのコミュニケーション学的考察の可能性

埴 幸枝 (国際基督教大学大学院)

絶対的な権力とそれにもとづく安定的な秩序構造がみられる社会では、しばしば笑いは権力を批判するものでありえた。それでは権力の形態が唯一の絶対的なものから流動的・遍在的なものと化した現代社会において、笑いはどのような役割を担いつつあるのだろうか。本研究では現代社会における「商業的な笑い」を分析の俎上に載せながら、それをコミュニケーション学の範疇において考察することの意義を明らかにする。

文化産業としての「お笑い」には、それを再生産するシステムが組み込まれている。芸人たちは継続的な競争の過程に投げ込まれ、メディア・ミックス戦略をつうじてキャラクター化されていく。そこでは個別的にみれば個性的ではあるが、システム全体からみればひとつのパーツでしかない芸人たちが入れ替わっても、番組などのフォーマットそのものが揺らぐことは殆んどなく、結果的に「形式の反復化>内容の差異化」という状況が成立している、と理解することができる。

また、「芸人たちに要請される役割」に着眼すれば、しばしば彼らは司会やイベントプロデュースを担う「高いコミュニケーション能力」を保持する者として、あるいは視聴者にとって訴求力のあるコミュニケーション・モデルを提示する者として位置づけられる。現代のテレビ表象における芸人たちのコミュニケーション神話の背景には、人々がコミュニケーションという事象に潜在的な不安を感じていると同時に、その不安を解消してくれるような唯一の/正しいコミュニケーションが存在すると想定されている可能性を指摘できる。

つまり「商業的な笑い」は「権力批判としての笑い」とは根本的に異なるだけでなく、芸人を信仰の対象に転化することで権力の源泉になりうる可能性すら孕んでいる。これを批評するものとして、本研究では森村泰昌の映像作品『独裁者を笑え』を分析の俎上に載せ、現代社会における笑いの位置を多角的に分析していく。

B会場 (J302)  
Room B

研究発表  
Presentation

語りと記憶  
Narrative and Memory

### 記憶が歴史認識に与え得る影響 - 「公共(性)」の媒介機能からの考察 -

千葉 美千子 (北海道大学大学院)

本研究報告の目的は、「公共(性)」の媒介機能に着目しながら、歴史の「原資料」であり、「言説の資源」でもある記憶が歴史認識に与え得る影響を考察することにある。

近年の政治文化としての記憶に対する関心の高まりを背景に、歴史学と記憶の関係も質的变化を遂げている。それは、記憶の主体の抱える今日的課題が、彼/彼女らに対する歴史認識と分かち難く結びついているという問題関心から生まれたものである。

しかし、これまでの歴史学の重心は客観的事実の検証にあり、「公共(性)」の媒介機能、すなわち双方向的なコミュニケーションを通じて個的/集合的記憶が収斂・集約されていくプロセスに対する考察は、比較的限られてきた感がある。当然、国民国家の記憶と一致しない記憶が排除されてきた事実に対する問いかけも十分ではない。

以上を踏まえ、本研究報告では、まず、記憶が歴史学に果たし得る影響を確認した上で、了解志向に基づくコミュニケーションから形成された記憶は、歴史認識の修正、あるいは何らかの意味づけを与えるという点で重要な役割を果たし得ることを明らかにする。

次に、そのような記憶は、メディアが作り出す一方向的な記憶とは全く異なるものであることを確認する。さらに、記憶の3つのタイプを概観した上で、「公共(性)」の内に収められた記憶は、差異化と一般化という異なるベクトルを持ちながらも、歴史認識に複数の視点と共通理解の基盤を提供できることを述べる。

最後に、「公共(性)」の媒介機能を通じて収斂・集約された記憶は、多様性から見出される差異を尊重するという点においても、記憶の個別的価値の尊重に加えて個々の記憶を一般化するという点においても、歴史認識に大きな影響を与え得ることを明らかにする。

### 水俣病 / 水俣病事件を語りつぐための模索 ある語り部補助の試みから考える

池田 理知子 (国際基督教大学)

水俣市立水俣病資料館の「語り部」の講話のなかには、語り部補助と呼ばれる「ファシリテーター」との対話形式で進められるものがある。同じ「語り部」の講話であっても、語り部補助が誰かによって場の雰囲気や伝えられるメッセージが異なる。今回の発表では、Aという語り部補助に焦点を当て、なぜ彼女がアシストする講話が豊富なメッセージを聴衆に伝えているように思えるのかを分析する。

例えばAは、ある「語り部」の講話に対し、規定内の45分では短すぎるぐらいで補足することがたくさんあると語る一方、他の語り部補助は時間が余って仕方がないと話す。なぜこうした差が生まれるのであろうか。Aの講話での様子やインタビューから浮かび上がってきた彼女の試みを通して、「語り部」が主役だと思われる講話の場が別の形になり得る可能性を示唆する。それは、主体的に考える語り部補助の存在が、主-従という関係性を脱構築する様子でもある。そしてその様子を描写することは、講話という資料館が設定した枠への疑問と再考を促すことにもなり得る。語り部補助が「補助」というカテゴリーから抜け出し、語り部の「パートナー」となる可能性を探ることは、水俣病 / 水俣病事件を伝えるための多様な方法を探るための重要なプロセスだと考える。

C会場 (J214)  
Room C

研究発表  
Presentation

異文化適応  
Intercultural Adaptation

## 異文化でのコミュニケーションがパーソナリティーに与える影響

### - アメリカ在住日本人へのライフヒストリーインタビューを通しての考察

田中 真奈美 (東京未来大学)

海外で生活するようになって、日本人であることを意識し始め、自分とは何者かを考えだすケースが多く見られる。在米生活が長くなると、アメリカ文化の影響で自分の考え方や行動が変化してきたことに気づくことも少なくない。

自文化を離れ、異文化という特殊な環境で生活することによって、どのようにパーソナリティーが影響を受けるのかを調査したいと考えた。アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコで30年以上長期滞在をしている日本人女性小林園子さん(仮名)(60代)にインタビュー調査を行なった。どのようにパーソナリティーが影響を受けたのかを考察する。

結果として、長期滞在者の日本人女性である小林さんは、日本に住んでいた頃にすでに自己が強く確立されており、長期滞在の影響により、アメリカに適した自我の強い、活動的な自己を形成していったことが明らかになった。差別や理不尽なことなど、アメリカでの生活の中で様々な経験をし、それを解決していくために自ら声を上げていかなければいけなかったことが影響していると考えられる。

同様に、日本人としての「民族アイデンティティ」が長期滞在によって強く意識されることが分かった。小林さんは、日本の習慣を大切にしており、四季折々の祝いの行事は、渡米当初から今まで、ずっと続けている。小林さんは、最初は意識はしていなかったが、子どもや孫たちに日本文化を教えるいい機会になったと感じている。また、日本を強く残し、意識ながらもアメリカ的な部分が増加し、日米両方が内在することも明らかになった。インタビュー中もかなりの頻度で会話中に英語を使用していた。それらの表現は、日本語では言い表しにくいことが多かった。このことは、筆者の渡米当初から感じている在米生活の長い日本人の特徴と共通している。

## 沖縄県在住フィリピン人女性の生活実態調査

仲里 和花 (沖縄キリスト教短期大学)

グローバル化の時代を迎え、日本でも多くの外国人移住者が見られるようになり、国際結婚も増加の一途を辿っている。厚労省の人口動態統計によれば、2010年の日本における国際結婚件数のうち、夫日本人・妻フィリピン人の組み合わせは17%を占め、妻中国人に次いで2番目に多い。この要因は、日本に出稼ぎに来るフィリピン人女性と日本人男性の出会いの増加である。フィリピン人女性出稼ぎの背景には、フィリピンの失業対策や日本の労働力不足がある。沖縄県でも90年代前半からフィリピン人口は増加傾向にあり、県在住外国人の22%を占める(法務省入国管理局)。日本では、フィリピン人女性エンターテイナーや日比国際結婚に関する研究が多く行われているが、県出身男性と結婚したフィリピン人女性についての研究は少ない。そこで本研究では、県出身男性と結婚したフィリピン人女性の生活実態を明らかにするとともに、彼女たちの異文化適応問題を調べ、その内容に考察を加える。



本調査では、県出身男性と結婚したフィリピン人女性を対象に 250 人にアンケート調査を行った。回収率は 53% (133 人) であった。質問の内容は、「沖縄に移住する前の状況」「家族関係」「友人関係」「日常生活」「就業状態」「家族の属性」など 65 項目にわたる。本発表では「家族のコミュニケーション/家族の問題」「地域社会での活動」「現在の状況」の項目に絞る。

「家族のコミュニケーション・家族の問題」に関しては、コミュニケーションによる問題、価値観の相違が原因で、夫との関係が上手くいかない(3割)、子どもがいじめやアイデンティティーなどの問題を抱えている(6割)、沖縄の「家」制度の習慣や祖先崇拝に適応できず、夫の両親と問題を抱えている(5割)女性がいることがわかった。また、「地域社会での活動」に関しては、5割の女性が高学歴であるにもかかわらず、現場労働に限られていた。さらに、「現在の状況」に関しては、4割の女性が、現在、不安や悩みを抱えていることがわかった。本調査から、在沖フィリピン人女性が抱える問題を概観することができた。

## The sound of silence:

### Classroom participation of Japanese graduate students in chemistry lectures

Mika Tamura (Kyushu University)

This paper explores the issue of silence from Japanese students in science and engineering intensive lectures given by lecturers from western universities. The phenomenon of classroom silence is not regarded as unique to Japan, but rather, it is generally considered a common characteristic of students from Eastern Asian countries. The silence of East Asian students, attending universities or ESL programs in Western English-speaking countries, has been amply discussed by researchers of both intercultural communication and English-language pedagogy. There have been, however, very few studies primarily focused on the silence of Japanese graduate students in science and engineering where English is the *de fact* international language. When east meets west, cultural differences are invariably exposed. Linguistic ability aside, the silence and reticence by Japanese graduate students were found to be poorly evaluated and perceived as rejection from the graduate students by the western lecturer. The study found that the silence of Japanese graduate students in science and engineering lecture was attributed to mix of factors, including language anxiety, relevance to own research, personality and difference in educational practices and cultural value which is symbolized by the proverb “the nail that sticks out gets hammered down.” In order to activate the classroom, it is important for Japanese graduate students not to only learn English language but also to become aware of its value in effective learning. This paper takes a qualitative research focus by conducting student interviews, in-depth interviews with lecturer and classroom observation. Further, it attempts to explore the experiences of those participating to propose solutions from the perspective of improved inter-cultural communication training.

B会場 (J302)  
Room B

研究発表  
Presentation

組織コミュニケーション  
Organizational Communication

### 提案する部下、しない部下

#### 職場における『Voice』行動に関する縦断的データの分析を通して

松永 正樹 (立教大学経営学部)

職場の改善や生産性向上のためのアイデアや提案を、部下が自発的に上司に伝えることを、組織行動学では『Voice』行動と呼び、重要なコミュニケーション行動として様々な研究が進められている。しかし、『Voice』行動に関する先行研究は多いものの、様々な予測変数の効果を統合的に整理するフレームワークについては、いまだに模索が続けられている状態である。さらに、既存の研究は「部下が『Voice』行動をするかしないか」という頻度に関するものがほとんどであり、「実際に部下が『Voice』行動をとる際には、具体的にどのようなパターン、プロセスがみられるのか」というコミュニケーション学的視点が充分ではない。そこで本研究では、これらの点を明らかにすべく、「計画的行動理論 (Theory of Planned Behavior; TPB)」を統括的なフレームワークとして用いて仮説を導出し、その検証のために、国内の企業 106 社にフルタイムで勤務している社会人計 539 人から、それぞれ約 2 週間の間隔をおいて、計 3 回データを収集した。さらに、この縦断的データを、マルチレベル構造方程式モデリング (Multi-Level Structural Equation Modeling; ML-SEM) および、潜在プロフィール分析 (Latent Profile Analysis; LPA) と呼ばれる統計手法を用いて分析した。ML-SEM の結果、(1) 個人の利得認識や職場での規範に加え、上司との人間関係が『Voice』行動に関する意思の強さと高い相関を示す、(2) 上司との人間関係の影響は、利得認識をはじめとする個人レベルの心理的諸要因によって媒介されている、(3) 個人レベルの諸要因の影響力は独立して、職場全体における上司と部下の関係性のあり方が『Voice』行動に大きな影響を及ぼす、といった TPB 的枠組と合致するパターンが示された。さらに、LPA を通じて、『Voice』行動には様々なパターンがみられることも確認された。本論文内では、これらの分析結果が持つ理論的意義に加え、実際の職場で働く上司やマネージャーにとっての洞察についても考察した。

#### 日米企業のコミュニケーションに見られる組織文化の変容

1998~2008年

鈴木 志のぶ (北海道大学)

組織の行動を文化と捉える見方は 1980 年代以降組織コミュニケーション研究で用いられてきた。本研究では Schein の考えをもとに、コミュニケーションの結果として組織が残した文書が組織文化を表すと考える。本研究の目的は、経営環境の変化と国の文化が組織文化にどう影響するかを明らかにすることである。本研究の理論的な枠組みとして、Inkeles (1998) が提案する、組織・社会構造の異文化間での収束 (convergence)・拡散 (divergence) の概念を用いる。

本研究のデータは、米国証券取引委員会に 1998 年から 2008 の間に提出された日本企業 20 社の英文による年次報告書と、それら 20 社に業種、経営規模の点で類似した米国企業 20 社の同期間の年次報告書で、報告書の

総数は255であった。これらについて、先行研究をもとに選んだ組織文化関連語彙を、相対的出現頻度をもとに一定数に限定した。それらを因子分析し、組織文化を表す3つの因子を抽出した。抽出された因子は「業績」「継続」「発展」をそれぞれ表すと解釈された。次に各因子に関し、(a) 組織文化の差に国の文化が影響しているか、(b) 経営環境の経年の変化と共に組織文化も変容するか、(c) 国の文化差によって組織文化の変化の方向・割合に差は見られるか、という問いを検証した。SPSSによる混合モデル分析の結果は、「業績」と「継続」の因子について、国の文化と年次が組織文化の差を説明する有意な効果を持つことを示した。すなわち、「業績」「継続」を表す語彙群の、相対的出現頻度は日本企業よりも米国企業の方が高く、年次が上がるにつれ、それらの相対的出現頻度は日米双方の企業で同様の増加傾向を示すことが分かった。「発展」の因子に関しては、国の文化・年次とも有意な効果は見られなかった。国の文化と年次の相互作用効果はいずれの因子についても有意ではなかった。

## 変革型リーダーのファシリテーション・コンピテンス

池田 章子（明治大学大学院）

本論では組織コミュニケーション研究の重要なテーマであるリーダーシップ論において、近年最も説明力が高いと考えられている変革型リーダーシップのコミュニケーション・スタイルに焦点を当てる。特に変革型リーダーが個人のみならず集団の有効性を高めることを示唆するため、その付加的なコミュニケーション機能としてファシリテーションの可能性について論じ、研究の意義を提示する。

ファシリテーションはグループのプロセスや構造に関わるスキルであり、これらを機能的に向上させることでグループ効果を高めることが期待され、経営コンサルティングを中心とした実践分野で浸透している。主にグループ外の第三者として、ファシリテーターは「グループの現実的な決定に対しては中立であるが、グループが問題解決や意思決定を行う際に、プロセスの管理に責任を負う者」と定義される。一方ファシリテーターの役割をリーダーが担うことの有効性について、組織論や組織行動論においても議論がなされている。しかしこれらの議論において、ファシリテーターやファシリテーションの体系化、およびその実証的な検証は不足している。

変革型リーダーシップとファシリテーションは、その本質ともいえる影響プロセス、すなわちフォロワーの内発的なモチベーションを引き出し、前提の疑問視や問題の再構築を促すことによって異なる角度から考えるよう刺激し、創造的かつ革新的な成果を導く点において、ほぼ一致する概念であるといえる。本研究では、集団内のメンバーの関係性を促進するうえで欠かせない機能として、実践分野を中心にさまざまな定義やモデルが議論されているファシリテーションを基礎に、変革型リーダーのファシリテーション・コンピテンスを体系化し、その有効性について実証的に検討する予定である。

## 第 42 回年次大会実行委員会 Annual Convention Committee

### 大会実行委員長 Program Chair

森川 知史 (京都文教短期大学)

Toshifumi Morikawa (Kyoto Bunkyo Junior College)

### 実行委員 (アイウエオ順)

森口 稔 (京都外国語大学)

Minoru Moriguchi (Kyoto Univ. of Foreign Studies)

守崎 誠一 (関西大学)

Seiichi Morisaki (Kansai Univ.)

協力: トップツアー-京都支店

## 実行委員 (CAJ) CAJ Committee Members

### 大会プログラム・学術局関連 Convention Program

責任者	守崎 誠一 (関西大学)	Seiichi Morisaki (Kansai Univ.)
	師岡 淳也 (立教大学)	Junya Morooka (Rikkyo U.)
	吉武 正樹 (福岡教育大学)	Masaki Yoshitake (Fukuoka U. of Education)
	清宮 徹 (西南学院大学)	Toru Kiyomiya (Seinan Gakuin U.)

### 大会プログラム・発表査読者 Review Committee

青沼 智 (津田塾大学)	Satoru Aonuma (Tsuda College)
宮原 哲 (西南学院大学)	Akira Miyahara (Seinan Gakuin U.)
守崎 誠一 (関西大学)	Seiichi Morisaki (Kansai Univ.)
師岡 淳也 (立教大学)	Junya Morooka (Rikkyo U.)
吉武 正樹 (福岡教育大学)	Masaki Yoshitake (Fukuoka U. of Education)

### 受付・事務局関連 Registration

責任者	松本 茂 (立教大学)	Shigeru Matsumoto (Rikkyo U.)
	鳥越 千絵 (西南学院大学)	Yuko Kawai (Seinan Gakuin U.)
	野中 昭彦 (中村学園大学)	Akihiko Nonaka (Nakamura Gakuen U.)
	與古光 宏 (九州産業大学)	Hiroshi Yokomitsu (Kyusyu Sangyo U.)

### 大会広報関連 Advertisement

責任者	山口 生史 (明治大学)	Ikushi Yamaguchi (Meiji U.)
	北本 晃治 (帝塚山大学)	Koji Kitamoto (Tezukayama U.)
	石橋 嘉一 (山形大学)	Yoshikazu Ishibashi (Yamagata U.)

**コミュニケーション学会会長及び本部 (学会事務局) President and Office of the CAJ**

会長 President 宮原 哲 (西南学院大学) Akira Miyahara (Seinan Gakuin U.)

学会事務局 CAJ Office :

〒171-4026

東京都豊島区西池袋 3-34-1

立教大学経営学部 松本研究室内

日本コミュニケーション学会事務局

Phone: 03-3985-4026

E-mail: cajoffice@caj1971.com

College of Business, Rikkyo University

3-34-1 Nishi-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo 171-8501

The Office of the Communication Association of Japan

Phone: 03-3985-4026

E-mail: cajoffice@caj1971.com

入退会、住所等変更、会費納入、及び学会誌バックナンバーと記念図書購入申込に関する問合せ先 :

**For inquiries regarding membership, dues, and publications:**

一般社団法人 学会支援機構

〒112-0012 東京都文京区大塚5-3-13

小石川アーバン4F

Phone : 03-5981-6011 FAX : 03-5981-6012

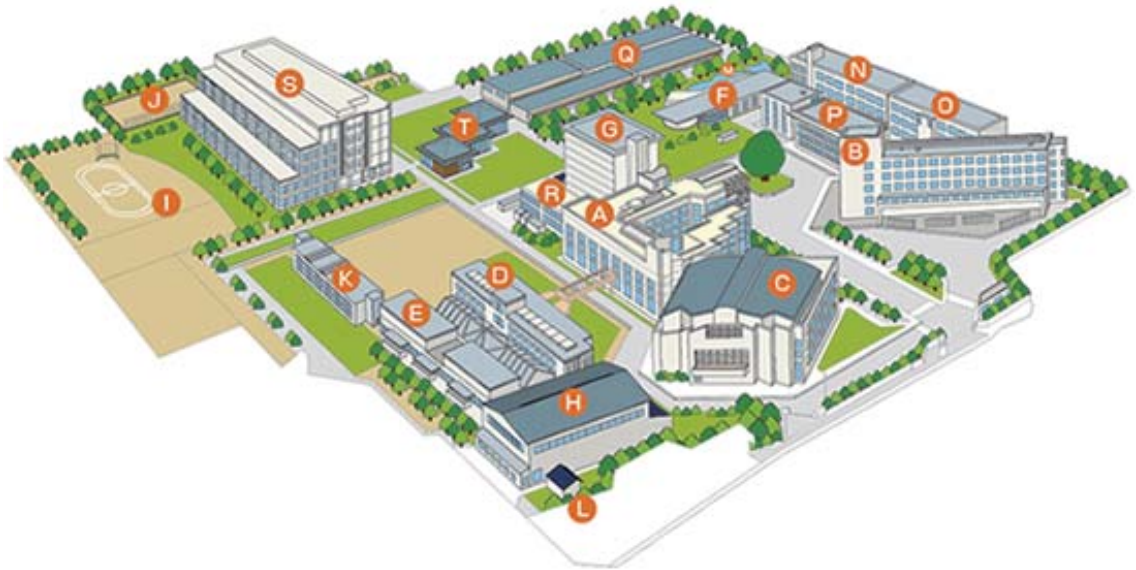
E-mail: caj@asas.or.jp

Association for Supporting Academic Societies

Koishikawa Urban 4F

5-3-13 Otsuka Bunkyo-ku Tokyo, 112-0012

## 会場マップ



<b>A</b> 光暎館	<b>H</b> 西体育館	<b>O</b> 4号館
<b>B</b> 普照館	<b>I</b> 新グラウンド	<b>P</b> 5号館
<b>C</b> 同唱館	<b>J</b> テニスコート	<b>Q</b> 7号館
<b>D</b> 常照館	<b>K</b> 時習館	<b>R</b> 14号館
<b>E</b> 弘誓館	<b>L</b> 弓道場	<b>S</b> 月照館
<b>F</b> 恵光館	<b>M</b> 尋源池	<b>T</b> サロン・ド・バドマ
<b>G</b> 至道館	<b>N</b> 1号館	



◆ 主要駅からのアクセス

近鉄京都駅から (約25分)



JR大阪駅から (約50分)



阪急梅田駅から (約1時間10分)



JR草津駅から (約45分)



近鉄大和西大寺駅から (約35分)



JR近江八幡駅から (約1時間)



JR亀岡駅から (約50分)



JR彦根駅から (約1時間10分)



京阪淀屋橋駅から (約50分)



JR堅田駅から (約50分)



京阪枚方市駅から (約30分)



京阪三条駅から (約25分)

